

【第四回】 「毛筆の基礎・基本とその書き方」

— 気脈を貫通させる (行書) —

静岡大学教授  
本誌手本揮毫者

杉崎 哲子

◇はじめに

漢字の古典の臨書学習をする場合、一般的には、最初に楷書に取り組み、その後で行書へと進めます。

今回は、書写における「点画のつながり」を意識することからはじめて、一般的な行書学習の要点を確認します。さらに行書の代表的な古典に触れながら、「気脈の貫通」について説明していきます。

■「点画のつながり」について

毛筆で文字を書く時、一画ごとに墨液を含ませ、硯で念入りに筆の鋒先を整えて書く人を見かけます。書写では、特に始筆のすっきりと

した作品が好まれる場合もあるので、できるだけ鋒先をきれいに整えて書き始めたいという意識が強くなるでしょう。

しかし、毛筆の書とは、書き終わった結果が手本にしている文字と同じ形に仕上がることを目指すものではありません。それでは、例えば籠字のように点画の外周を線で囲み、その中を塗り潰すのと変わらなくなってしまいます。

文字を書く際には、塗る動きとは全く違い、一画目から最終画まで、あるいは次の文字につながる一連の動きや流れが存在します。これについて小学校学習指導要領・国語には、第五学年及び第六学年の書写の指導内容として「点画のつながりを意識して書くこと」が挙げられ、検定教科書は、その「つながり」を点線で示しています（下図）。また、中学校国語科書写では、行書学習のはじめに、「つながり」を意識

させて楷書との違いに注目させています。楷書、行書、いずれの場合も、一画ずつ硯の方に筆を運ぶと、一連の流れが途絶えて不自然な動きになり、「点画のつながり」をとらえにくくなってしまいますので注意が必要です。



「行書」の特徴の一つ「連続」

行書は、漢から晋の時代にかけて、楷書や草書と時を同じくして確立されたと考えられています。楷書の明確性と草書の速書性との両方の長所を併せもった書体で、日常的にも便利に使われています。

特徴としては、楷書が直線的で角ばって点画が明確であるのに対して、行書は曲線的で丸みがあり、点画の連続や省略が見られます。この連続や省略の仕方も画一的ではないので、様々な書き表し方が存在します。

次に挙げる文字は、書写学習の中で書かれたものです。「点画のつながり」をどのようにとらえているか探ってみましょう。

○書写学習者の作品例「清心」  
Aさんの「清」「心」



Bさんの「清」「心」



Aさんの書いた文字は、「さんずい」から四画目（「青」の一画目）の横画に向かって自然に払い上げています。それに対して、Bさんのその横画は、改めて筆を入れ直したように見えます。同様に、六画目から七画目の連続する部分についても、Aさんが短い距離でつなげているのに対し、Bさんは六画目を書いた後に筆を少し紙面から持ち上げ、改めて左上から鋒先を入れ直してうねりを加えて書いていることが分かります。

このように、行書では、書かれた文字の、特に始筆（起筆）や終筆（収筆）の部分に、「つながり」の仕方が現われます。

「気脈」「筆脈」

点画の一つ一つは、気持ちの上でつながりをもっています。この「点画のつながり」の意識のことを一般的に書道では、「気脈」と称し、

《行書の特徴》『蘭亭序』より

○方向や形の変化

・終筆の変化



「其」の七画目ははねている。

・方向の変化



三画目を短い横画のように、左から右へ書いている。

○点画の連続

・筆脈の実践化



つながりが線になっている。

・点画の直接連続



「文」の一画目と二画目がつながって一体化している。

○点画の省略

門構えの書き方



○筆順の変化

「至」の「土」部分



「筆脈」「脈絡」ともいいます。楷書では空間筆意ということもあり、狭義にとらえて、楷書の場合を「氣脈」、行書や草書では「筆脈」と呼ぶこともあります。

楷書の場合、氣脈（空間筆意）は、始筆（起筆）の先にわずかに現れる程度ですが、行書や草書、仮名では空間筆意が連続の線となって多く出現するので、「筆脈」という方が分かりやすいかもしれません。

筆脈に注目することによって、書き手が氣脈をどうとらえ、どのように書き進めていったのかを理解することができるとは、

### ■「氣脈を貫通させる」とは

毛筆で書かれた点画を、「線」ということがありますが、書の線は、楷書の場合でも、単なる無機質な線分ではなく、一息で筆を動かして書かれるものです。運筆の一過性といわれるように、逆戻りしたり、幾度も塗り重ねたりするものではありませんから、そこに必ず動きの跡が残る、それが「線質」を作り上げます。

ここでは行書学習のポイントとして、点画の始筆（起筆）、終筆（収筆）部分の書き方に注目することを強調しておきましょう。「つながり」を意識してとらえると、氣脈の貫通に結び

つけることができます。

「氣脈の貫通」は、書の生命であるといわれます。仮に紙面に現れた動きの線がぶつ切れ状態になった作品があるとしたら、それは、筆脈が途切れて氣脈が続かず、息切れの状態になっていると考えられます。

そこで、「氣脈の貫通」のためには、できるだけ一字を一筆で書く習慣をつけることが大切になります。かといって、ただだらとした単調な動きで進む書き方では、筆勢の感じられないものになってしまいます。

さらに筆圧の強弱や運筆速度の遅速緩急等の変化が加えられると、運筆に勢いが生まれて筆力が満ちてきます。律動感が感じられるようにもなると、書の魅力が増大します。

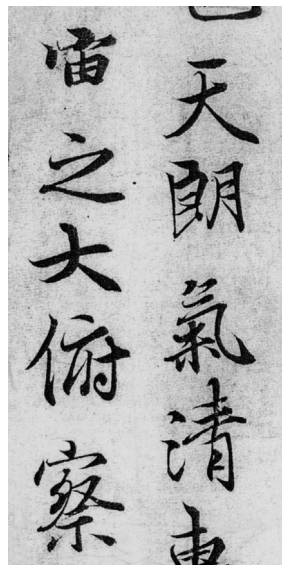
### ■「蘭亭序」で学ぶ

書聖・王羲之の書である「蘭亭序」は、古来より、洗練された美しい行書の手本として最も高く評価されています。これが書かれた当時の中国では、響掬という特殊な模写の技術があり、墨の濃淡や潤濁の変化、かすれまで本物そっくりに透かし写す職人がいました（響掬による模写を掬模本と呼びます）。

唐の太宗は、王羲之の書をこよなく愛して収

集し、宮中に専門の工房を設けて量産させていました。「蘭亭序」の真跡は、なかなか手に入らなかったのですが、やがて太宗の所有となり、太宗が死去した際に副葬されたといわれています。現在伝えられているのは全て臨摸されたものと拓本です。

蘭亭序「神龍半印本」



蘭亭序「張金界奴本」



中でも「神龍半印本」は高等学校芸術科書道の教科書にも多く掲載されており、筆路が明

快で用筆が分かりやすく、基本学習に適すると  
いわれています。

左に挙げた学習者二名の臨書は、どちらも起  
筆や収筆に注目し、特徴をよくとらえて書いて  
います。

○学習者の臨書「神龍半印本」

Cさんの臨書

天朗氣清

Dさんの臨書

天朗氣清

ここで注意すべきは、右の臨書でもとらえら  
れているように、「蘭亭序」には、前述のBさ  
んの作品例の「清」でみたような、うねりのあ  
る筆使いが随所にみられるということです。

このことを含め、書家の江口大象先生は  
「蘭亭序」について、「技巧というのはふつう嫌  
味になるが、あれだけ技巧を使って嫌味がない  
のは珍しい」と述べられ、学習量も配慮されて、  
行書を初めて習う人には「張金界奴本」を勧

められるそうです。

杭迫柏樹先生も、「神龍半印本」は達筆だが  
平面的なため、非常に自然で筆意が遠い感じが  
する。「張金界奴本」によって、空間を楽しまれ  
るそうです。「張金界奴本」の持つ深い奥行き  
は、筆の内側を働かせた非常に締まって集中す  
る執筆法によるものと考えられます。

「神龍半印本」で筆路を辿ったら、拓本の「張  
金界奴本」をみて、次の点画へ行く時の遠い上  
下運動を感じ取るという学習も、氣脈をとらえ  
て書くうえで、大いに勉強になるでしょう。

(参考)『「蘭亭序」をどう学ぶか』『墨』第一四八号、芸  
術新聞社、二〇〇一年・二月号)

### 「集王聖教序」で学ぶ

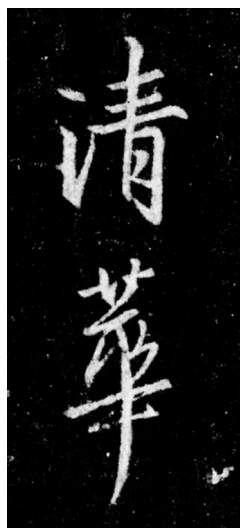
「集王聖教序」は、「集字聖教序」「大唐三  
藏聖教序」の名で親しまれています。太宗が  
こよなく愛した王羲之の字を集字したもので、  
行書の学習によく取り上げられます。

さて、この古典の臨書では、氣脈をどうとら  
えていけばよいのでしょうか。  
集字ですから、文章にある次の文字への筆脈  
は、拓本の文字には現われていません。元の碑  
文と全く同じ語順で書かれていたということは  
考えにくいからです。

「集字聖教序」をよく確認すると、「軽快な筆  
使い」と「素朴で単純な筆使い」との二種類の  
筆使いを確認できます。その違いは、集字した  
元の文字が、いつ書かれたものかによるもので、  
唐代以降、後の時代になるほど、筆使いが軽快  
になったといわれています。

また、線の太さにも違いが見られ、太い線は  
共通して起筆が鋭く尖っているのに対して、細  
い線は丸みを帯びて流動的になっています。  
堂々たる風格と冷静沈着さ、鮮やかでリズム  
カルな運筆の動きなど、各々の文字から多くの  
ことを学べますが、何よりも、こうした多様な  
現われの特徴をとらえて、意図的・意識的にそ  
れらの氣脈を貫通させましょう。

### 集字聖教序



○学習者の臨書「集王聖教序」

Cさんの臨書

Dさんの臨書

清  
清